第１回産業と活力専門分科会議事概要

１．日時

平成１９年２月２３日（金）１４：３０～１７：００

２．場所

ボルファートとやま

３．出席委員（敬称略）

長尾座長、浅野委員、梅崎委員、小柳津委員、清川委員、坂田委員、新道委員、多仁委員、谷本委員、吉田委員、吉田委員（計１１名）

４．議事（概要）

（１）開会

（２）挨拶

岡田北陸地方整備副局長

（３）委員紹介

（４）運営要領について

事務局から運営要領について説明

（５）座長挨拶

（６）資料説明

事務局から資料１、資料２について説明

（７）意見交換

（８）座長とりまとめ

（９）閉会

次回は、３月１２日（月）にボルファートとやまで開催

５．主な発言内容

・良い資源がありすぎて産業まで結びつける動きがない（金庫に眠っている）。

・港、高速道路、空港は単独では機能しない。ネットワーク効果が重要であり、非効率なネットワークは流通コスト増につながる。

・太平洋側のインフラ整備は北米などのインフラ整備の後追いであるが、アジア、ロシア、中国の発展は大きな潮流であり、日本海側のインフラ整備を先行して東アジアの本格的発展を待ち受けることがあっても良いのではないか。

・誰が主体となるのか、何をするのかを明確にする必要がある。

・北陸には世界に誇れる温泉旅館がある。旅館は着物、畳、ふすま、障子、食材など地域産業や地域文化と密接な関連があり、旅館が元気になれば地域産業も元気になる。

・北陸圏は環日本海や北東アジア経済圏を念頭に置いていたが、東アジアまで視点を広げるか

どうか選択が迫られているが、東アジア・北東アジアという視点が重要ではないか。

・北陸圏の観光資源をキチンと整理して、小松空港と富山空港が連携した歴史散策、山歩き、温泉めぐりなどの組み合わせによる観光ルートを整備すれば誘客につながる。

・何故北陸で育てた人が残らないのか、何故人が来ないのか。良いことはアピールしているが悪いこと（ワースト１０）も調べた方が良い。

・労働集約型の部分は東アジアに移しても良いが、伝統や文化に裏打ちされた「感性」が必要な技術集約型の部分は国内に残すことが重要。

・北陸の生き残りには、技術交流、人材交流で優位性を保つしかない。

・敦賀港では「人道の港」としてポーランドとの交流しており、１万人が観光パスポートで入港している。地域の歴史、自然をしっかり把握した上での地域づくりが重要である。

・水の質・量の良さは雪の恵であり、今年は雪が少ないが雪のありがたさ（恵雪）は水として電力・産業の基盤となり北陸の安定性につながっている。

・北陸には、伝統工芸、温泉、機会産業をはじめ、あれがある、これがあると際限がない、活力を出すために何でもやれば良い、やるためにどうするか。自分たちで仕組みを作っていく。

・地域の文化とストーリーを考え、自社の生産ラインで地域ブランド品を製造し、自分の手でアンテナショップ等で販売することが重要。行政は地域の核となる資産の整備に重点を置くべき。

・金沢ではフードピアや浅野川園遊会などのイベントを経済人が自腹をきって実施して行政に恩返ししている。

・常に対価を意識せよ。賃金は日本人が１番高いのだから、No.1 の製品を作らなければ生き残れない。値段が高くても他の追随を許さない質の高さなら勝てる。

・東アジアとの交流は九州、近畿とライバルも多いので、北東アジアとの交流も捨て切れない。１０年後は朝鮮半島の状況も変わっているはず。眠っている航路を開拓できないか。

（速報のため、事後修正の可能性があります。）